

『オプス・ポストウムム』におけるスピノザ主義再考

——カントのシェリングへの言及問題

内 田 浩 明

1. 問題の所在と最近の解釈

『オプス・ポストウムム』（以下、『遺稿』）は、周知の通り、カントが晩年に書き残した一連の草稿群である。アカデミー版『カント全集』の第二巻と第二二巻に分冊される形で収録された膨大な草稿の大部分は自然科学や自然哲学に関する叙述で占められている。これは、『遺稿』の執筆当初、カントが『自然科学の形而上学的原理』で述べられた事柄だけでは「批判哲学の体系の中に間隙（*lücke*）」（vgl. XII 257）ができると考え、『遺稿』を「自然科学の形而上学的原理から自然科学への移行」というタイトルのもと著作として出版するつもりであったからである。実際、『遺稿』の初期草稿群においてカントは、周知の「量、質、関係、様相」というカテゴリーに基づいて「物質」をその「運動力」から説明しようとするが（vgl. z. B. XXI 403ff., 291, 311, 394f.）¹、そうした箇

所で「自然科学の形而上学的原理」と「自然学」との「間隙」や前者から後者への「移行」について何度も言及している（vgl. z. B. XXI 292, 362, 366, 482）。

ところで、カントの著作や講義録、覚え書きなどには多くの思想家や科学者に対する言及が散見される。こうした例に漏れず『遺稿』でもカントはさまざまな人物に言及している。『遺稿』が元々「自然科学の形而上学的原理から自然科学への移行」という形で構想されたことから推察されるように、言及回数が最も多いのはニュートンであるが、次いで多いのがスピノザである。スピノザの名は第七束と特に第一束に頻出し、後者での言及は二二回にもほのぼの²。『遺稿』全体の割合からすれば、それだけスピノザの名が登場することを考えると、この時期のカントはスピノザを相当意識していたと言える。そのスピノザとともにリヒテンベルクが頻繁に「超越論的観念論」や「超越論哲学」との関連で登場し、加えてシェ

リングの名も見られる。

このため、『遺稿』のスピノザ・リヒテンベルク・シェリング言及問題に関して、これまでも解釈がなされてきたし、現在もなされている。理由や根拠づけの仕方はさまざまだが、カントがスピノザ、リヒテンベルク、シェリングを肯定的に評価したとする解釈と、これとは全く逆にカントが彼らを批判しているという解釈に大きく分かれる。

前者の急先鋒はトゥシェリングである。トゥシェリングは『遺稿』においてカントが自らの「超越論的観念論」とスピノザ主義を同一視し、上記三人を「超越論的観念論」の代表者（なかでもシェリングをカント自身の後継者）と見なしたとの解釈を行い⁽²⁾、別の論文でもヘーゲルの実体—主体概念を援用しつつ、カントはスピノザ主義と自身の哲学を同一視したのだと強く主張している⁽³⁾。

他方、ガイヤーによれば、『遺稿』における数多くのスピノザに関する言及はシェリングとその追従者が復活させたスピノザの独断的で一元論的な形而上学とカント自身の理論との差異を際立たせるためであるとされ⁽⁴⁾、最近ではオンナツシュがシェリングに焦点を当てながら、カントはシェリング哲学を自身の哲学の適切な継承とは決して考えなかったとの説を採っている⁽⁵⁾。あるいは、『遺稿』のスペイン語の訳者であるドゥケは、まさにトゥシェリングを名指しつつ、「カントがシェリングを超越論的観念論の正当な後継者と認めている」という彼の説には「あきれてしまう」との見解を表明している⁽⁶⁾。

このような両極端な解釈がなされる最大の理由は、何と云っても『遺稿』の叙述がきわめて断片的であることである。とりわけ他の哲学者・思想家に言及している箇所は曖昧な叙述が多く、彼らを評価しているのか、そうでないのか、あるいは、そもそもどのような意図で言及しているのかさえ不明な場合も多い。また、ことシェリングに関しては『遺稿』での言及はわずか二箇所にとどまるうえ、カントがシェリングの著作を読んだかどうかさえ定かではない。スピノザとリヒテンベルクについて論者は別稿で論じておいた⁽⁷⁾。しかしそこではそもそもなぜスピノザだったのか、『遺稿』でスピノザに言及することによってカントが何を言おうとしたのかなど論じきれなかったことも多い。本稿では最終的にはシェリングへの言及問題を究明するが、シェリングの名はスピノザとリヒテンベルクと併記する形で登場する。そこで、別稿では触れることができなかった点を補足しつつ、議論を別の角度から振り返ることから始めたい。

2. カントとスピノザ主義

別稿で論者が述べたのは、およそ次のような事柄である。まず批判期のカントは「汎神論論争」のさなかにおいてもスピノザを熱心には研究しておらず、彼のスピノザ（主義）に関する知識はヴォルフなどに負うところが大きいということ。また、批判期のカントのスピノザ（主義）批判は、スピノザの「実体論」を基軸に展開され、とりわけカントが体系の「要石」とみなした「自由」(vgl. V3)の擁護、ならびに「独断

的唯我論 (dogmatischer Egoismus)」という「観念論」批判の文脈で語られること。最後に「遺稿」ではスピノザが「超越論的観念論」と言われるようになるが、『遺稿』でもスピノザに対して多くの批判的文言が見受けられ、基本的にはスピノザ（主義）を批判していること。以上の三点である。

本稿で補足しておきたいことは、前批判期にもスピノザ（主義）を知る手がかりが多くあったにもかかわらず⁽⁸⁾、カントがスピノザ主義に厳しい批判を浴びせるようになるのは批判期以降、わけでも『実践理性批判』以降に集中していることである。スピノザを知る手がかりということ言えば、別稿ではベールやヴォルフなどに言及したが、それ以外にも次のようなものがある。

例えば、一七四四年には既に『エチカ』のドイツ語訳もシュミット (Johann Lorenz Schmidt) (ただし、出版当時は匿名) によってなされ⁽⁹⁾、一七五五年にメンデルスゾーンは『哲学的対話』を出版しスピノザを論じている。メンデルスゾーンの理解は、並行論と予定調和を混同するものであり、正しくないが、いずれにしろスピノザ（主義）に触れる機会はあつたはずである。しかし、前批判期のカントのスピノザないしはスピノザ主義への言及は少なく⁽¹⁰⁾、『汎神論論争』以降に集中している。これにはヤコービが『メンデルスゾーン宛書簡』におけるスピノザの教説について（以下『スピノザ書簡』）でカントをスピノザ主義者であるかのように語ったことが深く関係していると推察される。ヤコービは『スピノザ書簡』の「有限なものと無限なもの」について言及した箇所、次

のように述べている。

「全面的にスピノザの精神であるカントの次の箇所 (Folgende Stellen von Kant, die ganz im Geiste des Spinoza sind) が解明のために役立つかもしれない。」

ひとはただ一つの (einig) 空間を表象しうるにすぎないのであって、多くの空間について語る場合には、そのことで同じ一つの空間の諸部分のことを理解しているにすぎない。これらの諸部分はまた、いわば全てを包括する (allbefassend) ただ一つの空間の構成部分（この構成部分から空間の構成は可能である）としてそれに先行しえず、むしろただ一つの空間においてのみ考えられうるのである。空間は本質的にただ一つであり、その内の多様、したがって諸空間の一般概念ももっぱら制限に基づくのである。『純粹理性批判』25頁」(11)。

これに続けて、ヤコービは同様に「時間」についても『純粹理性批判』(以下、引用文中を除き『第一批判』)の32頁を参照するように述べた後、スピノザの『知性改造論』(具体的には、その末尾で知性の性質を八つに纏めている第二の項目(12))などを引き合いに出している。前段落の引用末尾のヤコービが参照するよう言っている箇所は、『第一批判』の「感性論」の空間の「形而上学的究明」に当たるが、そこでのカントの意図は空間の非概念性・直観性を示すことであり (vgl. A25)、ヤコービの言うようなことを意図したものでは当然ない。

これに対して、カントは翌一七八六年に論文「思考の方向を定めるとはどういうことか」を著し、「上述の学者たち」(13)

ヤコビとヴィットェンマンら」がどのようにして『純粹理性批判』のうちにスピノザ主義への支持を見いだすことができたのか、殆ど理解しえない」(VIII 143 Ann.)と疑念を露わにしている。そのうえでカントは、スピノザ主義を「独断論(Dogmatism)」または「独断的(dogmatisch)」と見なし批判するとともに「あらゆる狂信(Schwärmerei)」を根こそぎにするには、純粹理性能力のあの限界規定のみが唯一確実な手段である」と『第一批判』の正当性を主張している(vgl. ibid.)。

カントは、このようにスピノザ主義を「独断論」や「狂信」と批判するわけだが、とりわけ「狂信」は人間の理性の限界を超え叡智界へと飛翔するものであるため、カントが最も警戒し厳しく批判する概念の一つである。例えば、スピノザ(主義)に対する批判が随所に見られる批判期の講義録『ペーリツの哲学的宗教論』では次のように述べられている。「スピノザ主義は、根本において、一つの無神論(Atheismus)と呼ぶことができるが、これと同様に大いなる狂信とも呼ぶことができるだろう」(XXVIII 1052)。あるいは、一七八〇年代に書き留められた「レフレクシオン 6651」には「狂信の最たるものは([d]er höchste Grad der Schwärmerei)、我々自身が神の内あり、我々の現存在を神の内に感じ、直観することである」(XVIII 438)との記述がある。「狂信の最たるもの」とあるように、この「レフレクシオン」では、狂信がいくつかの段階に分けられ、プラトンのアイデアが「一切の可能的客観の神的直観」という言葉とともに「あらゆる哲学

的狂信の起源」として批判されている(vgl. XVIII 438)。カントが『第一批判』で無闇に新語を造ることを戒め、むしろ原義を活かすためにプラトンのアイデアをドイツ語の「イデー」としたことに鑑みれば(vgl. A312f/B368ff.)、単に当時「無神論」とされ危険思想の一つと目されたスピノザ主義への嫌疑が自分にも掛かるのを恐れたというだけではなく、ともすれば超感性的な世界へと飛翔してしまう人間理性の弱さを批判哲学によって防止するためであったと言えるだろう。

では『遺稿』においてカントはスピノザ(主義)をどのように捉えているのだろうか。『遺稿』においてもやはり批判的な文言が散見される。

神と人間に関するスピノザの概念―それによれば哲学者はあらゆるものを神の内に直観するのだが―は狂信的(schwärmertisch)(狂信的概念 conceptus fanaticus)である(XXI 19)。

スピノザ：これらすべて(「神と世界」)の理念を神の内に直観し、自己自身を神の内に直観する。狂信的(XXI 48)。神、世界(両者は私の外にある)、そしてこの両者を自由によつて結合する理性の主体(「これは」実体ではない)。―スピノザの超越論的観念論、これは言葉通りに取れば、超越的である、すなわち、概念無き客体である(XXII 22)。

「あらゆるものを神の内に直観」するという表現は、『遺稿』の随所に見られ、『遺稿』におけるスピノザ(主義)の標語

とも言えるが、特に前二者の引用にある「狂信的」という文
言は、先に見たように批判期でもスピノザ主義に向けられた
ものであった。こうしたことから『遺稿』においてもカント
はスピノザ（主義）を批判していると考えられる。

だが、もっぱら批判するためだけにカントはスピノザ（主
義）について繰り返し言及するのだろうか。おそらくそうで
はないと思われる。というのも、『遺稿』の第一束では「神
とは何であるか」「神は存在するのか」(XXI 9) など神に関
する叙述が多く見られ (vgl. z. B. XXI 19, 25, 27)、その際、『エ
チカ』に倣うような仕方でも叙述がなされているからである。
次の箇所などはその典型例である。

定義 (Definitio)

私は神という概念でどのようなことを考えているのか。最
高の完全性を有する存在者。〔すなわち〕全知かつ全能で、
その自己意識のうちに人格性を含んでいる（最高存在、最
高知性、最高善）、他の一切のものの創造者であるところ
の存在者。

スピノザ。すべての事物と自己を神の内に直観するという
恐るべき (ungeheuer) 理念は超越的であって、単に超
越論的かつ内在的・客観的ではない（それ自体で）。

問 神と世界は共に一つの体系を構成するのか、それとも
両者を結合する説は単に主観的に体系的であるにすぎない
のか。

原則 (＝公理)、定理、課題、帰結 (Grundsatz, Lehrsatz,
Aufgabe, und Folgerung)。

公理 (Axioma)

神の概念は、道徳的・実践的理性の原理である。すなわち、
あらゆる人間の義務の認識を神の命令とみなすことであ
る。

超越論哲学は、総合的原理の自発性という理性の主観的な
ものから理念によって始まる。超越論的観念論 (XXI 50)。

この後に更に定理 (Theorem) が続くが、冗漫になるため
割愛することにして、そもそもなぜカントはあえて『エチカ』
に倣うスタイルで『遺稿』を書こうとしたのだろうか。先の
箇所を引用し福谷茂は、前批判期の『自然神学と道徳の原則
の判明性についての研究』(1764) の時点では哲学が未だ幾
何学的秩序による叙述段階になかったのに対して、『遺稿』
は批判という作業が終わった後の段階であるため、カントは
「総合」的方法を採ったとの主旨の解釈を行っている⁽¹³⁾。カ
ント哲学に内在する要因という意味では論者も全く同意見で
ある。ただし、カントは『判断力批判』で批判的作業を終え、
ただちに理説の (doctrinal) 仕事に着手すると宣言しており
(vgl. v 170)、その後、実際に『道徳の形而上学』を公刊し
ている。つまり、この時期のカントは「予備学」である「批
判」に基づき自らの哲学を体系的に展開する作業に入ってい
る。『遺稿』が『道徳の形而上学』よりさらに後に書かれた
ものであることを勘案すれば、なおさら『遺稿』が体系を強

く意識し書かれたと考えるのが妥当であり、しかも「神、世界、人間」を「超越論哲学の最高の立場 (der Transzendentalphilosophie höchster Standpunkt) (強調引用者) (vgl. z. B. XXI 23, 32)」という自身の哲学体系を論じるには、スピノザはまさに打ってつけであったに違いない。その意味においても福谷の指摘は重要で正鵠を射たものと言えるだろう。

ただし、そのことに加え、カントが『遺稿』でスピノザに言及する背景には、当時の思想状況も深く関わっていると考えられる。周知の通り、それまで「死んだ大」と評されたスピノザ（主義）は、「汎神論論争」以降、スピノザ・ルネサンスと言われるほど脚光を浴びることになる。ドイツ観念論の哲学者、なかでもシェリングは、一七九五年二月四日付の有名なヘーゲル宛書簡で「僕はスピノザ主義者になりました」(HKA III, 22) と告白し、同年「哲学の原理としての自我、あるいは人間知における無制約者について」(以下、『自我論』) を公刊することになる。また、『自然哲学の体系の草案 (Entwurf) への序説』(1799) では「自然学のスピンノザ主義」(HKA I/8, 37) を標榜し、更にフィヒテと決別し「同一哲学」を本格的に展開するようになる。私の哲学体系の叙述」(1801) では「スピノザを模範」(HKA I/10, 115) に叙述を進めるほどスピノザ（主義）から強い影響を受けている¹⁴⁾。『遺稿』でスピノザとシェリングの名が同時に登場するのも決して単なる偶然ではないだろう。次節では『遺稿』とシェリングとの関係について考察したい。

3. シェリングへの言及と『超越論的観念論の体系』の書評

本稿1でも触れたように、『遺稿』におけるシェリングへの言及は、スピノザ（主義）と異なり、わずか二箇所であり、手がかりは非常に少ない。しかも、その言及は曖昧模糊としている。ともあれ、まずはその箇所を引用することにしよう。

その内で我々が神を純粹直観において表象するスピノザの神。注意 空間は純粹直観の客体でもあるが、いかなる理念でもない。

シェリング、スピノザ、リヒテンベルクによる超越論的観念論の体系、そして、言わば、三つの次元…現在、過去、未来 (System des transsc. Idealismus durch Schelling, Spinoza, Lichtenberg u. gleichsam 3 Dimensionen: Die Gegenwart, Vergangenheit u. Zukunft.) (XXI 87)。

超越論哲学は、認識の客体として自己自身を体系的に構成する形式的原理である。

シェリングの超越論的観念論の体系

『文芸新聞』エアランゲン 82号、83号参照 (vide Literatur// Zeitung, Erlangen No. 82, 83)。

超越論哲学は、概念に基づく（あるいは概念による）ア・プリオリな総合的認識の体系へと自己自身を自己意識の形式に関して観念的に規定する絶対的原理である (XXI 97)。

前者の引用でまず容易に気付かれることは、スピノザ・リヒテンベルク・シェリングの三人と過去・現在・未来というフレーズの奇妙な並べ方である。すなわち、このフレーズを三人の生没年や活躍した時期と結びつけて考えるなら、スピノザは過去、リヒテンベルクは現在、シェリングは未来となるはずである。にもかかわらず、カントは、シェリングは現在、スピノザは過去、リヒテンベルクは未来としている。こうしたことから当該箇所をカントの老衰に帰する解釈もある¹⁵⁾。カントに著しい老衰の徴候があったのは確かである。しかし、この「現在、過去、未来」という文言は、実は後者の引用で言及されている『文芸新聞「エアランゲン」」¹⁶⁾（いわゆる『エアランゲン文芸新聞』）（引用に際してはLZEと略記、段をSp.で記す）の第82号に見られる。また、その直前の「三次元」という言葉も同様に当該書評に見受けられる。このことからカントが実際にこの書評を読んだことはほぼ確実であると言える¹⁷⁾。そこで、以下では、『遺稿』に見られる文言も含め、その内容を確認することにした。

『エアランゲン文芸新聞』第82号と第83号は一八〇一年の四月二十八日と二十九日に発行され、前者が「超越論的観念論の体系」（以下、『体系』）の「理論哲学」、後者が「実践哲学」と「芸術哲学」について論じるものとなっている。このうち、『遺稿』の叙述に密接に関わるのは前者の第82号の方であるが、その冒頭はフィヒテの「知識学」を「我々の時代のものとして重要な成果」、「ドイツの学会が墮落した状態にあることを暴露した」等の文言で賞賛するものとなっている。それゆ

え、評者¹⁸⁾は続けて、およそ次のような二つの問いを立てている。これから「判定されるべき体系と知識学との関係はどういったものだろうか。（体系の概念を純粹に持つために、我々はまた著者〔＝シェリング〕の自然哲学への関係も規定しなければならないということが以下で示されるであろう。）さらに「問われるべきは」この体系が「打ち立てられること」によって「最近の哲学は何を獲得したのか」ということである¹⁹⁾（LZE, Sp. 649）。

このような二つの問いを立てたうえで、評者は、最初の問いこそ「体系そのものの成立〔起源〕」に関わるがゆえに「根本的」であると言いつつ、「この問いに答えるために、我々は著者が超越論的観念論を知識学そのものから（63頁以下）演繹することを企てる（der Verf. den transscendentalen Idealismus aus der Wissenschaftslehre selbst (S. 63 u. f.) zu deduciren unternimmt）地点に場所を転じなければならぬ」と述べている（vgl. LZE, Sp. 649）²⁰⁾。その後、『体系』の内容を、時にはフィヒテの「知識学」との関係などを交えつつ順を追って評しているが、カントが『遺稿』で言及している文言が登場するのは、書評の三分の二辺りからである。

「空間における三次元の演繹（Deduktion der drey Dimensionen im Raume）によって、そしてこれと平行して行われる磁気の、電気の、そして化学的プロセスの諸現象（Erscheinungen des Magnetismus, der Electricität und des chemischen Processes）の演繹によって、無機的自然の自然学のための基礎（Grundlage）が同時に置かれたのである」（LZE,

Sp. 654)。やはり評者は、こうした議論に問題がないわけではないとしつつも、シェリングが行った「この演繹によって自然の哲学的な構成に大いなる光明が差し込んだ」、あるいは、「自然科学にとってきわめて重要な革命が行われた」と好評しつづける (vgl. ibid.)。

書評ではこのように述べられているわけだが、評者が「空間における三次元の演繹」と言っているのは、『体系』の第三章「超越論的観念論の諸原則による理論哲学の体系」の「物質の演繹」(特にその「系 (Folgesätze)」) の叙述に相当する。当該箇所ではシェリングは次のように述べている。「なぜ物質が必然的に三つの次元へと広がっているものとして直観されなければならないのかを説明することが超越論的な探求に当然課せられうる一つの要求であるが、我々の知る限り、このことについて現在に至るまでいかなる説明も試みられることはなかった」(HKA I/9.1 140)。このように自負しながら、シェリングは「三つの根本力から直接、物質の三次元の演繹」(HKA I/9.1 140f.) を行うと述べ、評者の言うように物質の構成を「磁気、電気、化学的プロセス」の三つの力から演繹しようとしてくる (vgl. HKA I/9.1 141-145f.)。

このように、『遺稿』に見られる「三次元」という文言は、物質を「磁気、電気、化学的プロセス」という三つの段階に分けて「力」との関連で説明する文脈で登場するが、『遺稿』に見られる、もう一方の「現在、過去、未来」という文言が登場するのは、以上のような評価を下した次の段落で、それは次のようになってい

「それゆえ、産出的自我がその産物において限定されるとするならば、最初の限定の限定である新たな限界を想定しなければならぬ。これが、それによって内的直観が時間として、外的直観が空間として生じるところの現在であるが、自我によってそのようなものとして直観されることはない。それらが限定として直観されるなら、現在は過去と未来と結びつけられて、すなわち、時間は延長した量として、それゆえ空間と総合的に一つにされながら、直観されなければならない」(LZE, Sp. 655)。

ちなみに、この引用文が見られる段落は、実に三段にも亘る非常に長いものとなっているが、その冒頭は次のような書き出しで始まる。「超越論的観念論全体の本質は、直観の絶えざる展相化 (Potenzieren) に存する。従って、次なる問は、いかにして自我は自己を産出的なものとして直観するのか、ということである」(LZE, Sp. 654)。問いの内容や引用以外の叙述から引用箇所の内容は、『体系』では「物質の演繹」が行われた後の「第二期 (zweite Epoche) … 産出的直観から反省まで」の先の問いに対する「解決」(特にそのⅡとⅢ)に相当する (vgl. insb. HKA I/9.1 163f. 166ff.)。

以上の書評と『体系』の内容からまず言えることは、「三次元」と「現在、過去、未来」という二つの文言が同時には述べられていないことである。しかし更に重要なのは「現在、過去、未来」が『遺稿』にあるような形で人物と結びつけられているわけではない点である。従って、この文言はカントが先の書評を読んだ限りでのシェリングに対する覚え書きと解

するのが妥当と考えられる。実際、フェルスターは、当該箇所に関して、『遺稿』の英訳の注でカントが「超越論的観念論の三つの段階 (three stages)」ではなく、シェリングの著作(の書評)の考え」を示唆したと解説し²⁰⁾、論文では更に具体的に「シェリングの自己定立論の三つの時間的次元」であると解釈している²¹⁾。カントの件の文言が「自己定立」に直結するかどうかは措くとしても、少なくともこの文言がカント自身の書評に対する所感であることは間違いない。

では、カントはシェリングを評価し、自身の後継者とみなしたのだろうか。特に着目したいのは、本節冒頭の引用でカントがシェリング、スピノザ、リヒテンベルクを併記している点である。三人を並べている限り、この箇所において「超越論的観念論」が異なった意味で使われているとは考えにくい。だとすれば、スピノザ(主義)を批判している限り、カントは同様にシェリングも批判しており、自身の「超越論的観念論」と同一視したとは到底考えられない。次節ではこの説を補強するために『遺稿』の他の箇所も引き合いに出しながら、シェリングとカントとの関係を更に考察したい。

4. 『遺稿』に隠されたシェリングへの言及

『遺稿』におけるシェリングに対するカントの直接的な言及は、前節冒頭で引用した二箇所にとどまり、それ以外の著作でもシェリングへの言及は皆無と言っても過言ではない²²⁾。また、カントが『自我論』を所有していたということは確認されているものの²³⁾、それも含めカントがシェリ

ングの著作そのものを読んだかどうかは定かではない。

しかし、定かではないと言いつつも「状況証拠 (Indizien)」を積み上げながら、シェリングの著作を読んでいたとするのがトウシェリングである。トウシェリングによれば、『体系』の他に「世界霊について—高等自然学の一仮説」(1786)、「自然哲学に関する考案 (Idee)」(1797)、「知識学という観念論の解明に関する論文」(以下「HKA」に従う「概観」²⁴⁾) (1796/7) をカントが読んだとされ、なかでも最後の論文を最重要視している²⁵⁾。論者はこれらすべてを必ずしもカントが読んだとは思わないが、カントがシェリングを読んでいたことを伺わせる文言が確かに『遺稿』には見られる。例えば、「空間と時間」、「自己定立」に関する叙述である。

まず前者について言えば、シェリングは『概観』でカントの空間と時間について次のように述べている。

カントが直観における構想力の総合について語ったとき、やはりこの総合は心性のはたらきであったのであり、それゆえ上の総合の形式としての空間と時間は心性のはたらきの様式 (Handlungsweise des Gemüths) でゆった (HKA I/4 73f.)。

空間と時間のもっぱら形式的であって、心性の根源的なはたらきの様式である (HKA I/4 75, vgl. I/4 91)。

これに対して『遺稿』には次のような文言が見受けられる。

空間と時間は、直観の客体ではなく、単に直観の主観的な形式であるが、これは表象の外に存在するのではなく、主観の内にのみ与えられうる。すなわち、その表象は主観そのものの活動（『作用』(Act)であって、主観の感官によって構想力 (Einbildungskraft) の産物である (XXII 76)。

空間は、知覚可能な（覚知されうる）対象ではなく、直観されうるものを思惟されうるものとして表象する自己活動性（受容性ではなく、自発性）としての表象能力の産物である (ein Product des Vorstellungsvermögens als Selbstthätigkeit (Spontaneitas nicht Receptivitas)) (XXII 42)。

これらの引用の前半部分にある「直観そのもの」や「直観の主観的な形式」という規定は『第一批判』でもお馴染みのものである。だが、空間と時間を「自己活動性としての表象能力の産物」あるいは「主観そのものの活動」とその「産物」とする表現は見られない。「産物」はシェリングが好んで用いる表現であるし、そもそもシェリングの『概観』に見られる「はたらしき (Handlung)」は、カントにおいては「自発性」の能力である「悟性」とその「総合」ないしは「(超越論的) 統覚」に対して用いられるものである。

一方、「自己定立」に関して言えば、カントの自己定立論は、自我ないしは意識が「自己自身を客体にする (sich selbst zum Object machen)」あるいは「客体として構成する (konstituieren)」という「自己客体化」の思想とされるが⁽²⁶⁾、『遺稿』におけるカントの自己定立が「自己にとって客観になる」というシェリングの「自覚」やそれを述べる際の表現に酷似したものとなっている。

例えば、シェリングは『体系』において次のように述べている。「自覚とは、それによって思惟するものが直接的に客観になるところの活動〔作用〕(der Act, wodurch sich das Denkende unmittelbar zum Object wird.) であり、逆にこうした活動〔作用〕が自覚に他ならない」(HKA I/9,1 55f.)。また、別の箇所では「自己意識の活動〔作用〕によって、自我は自己自身にとって客観となる」というテーゼを「超越論的観念論の一般的証明」として掲げている (vgl. HKA I/9,1 70)。あるいは、カントが確実に読んだ先の書評では次のような表現が見られる。「自己意識の第一の活動〔作用〕(der erste Akt des Selbstbewusstseyns) は、主観的な自我が客観的なものを限界づけられるものとして見出すところの活動 (根源的感覚の活動) である」(LZE, Sp. 653)。「つかにして自我は、感覚するものとして自己自身に客観になるのか」(LZE, Sp. 653, auch vgl. HKA I/9,1 105)。更に言えば、「自我は、自我が産出的になることを通じて自己を感じ覚するものとして直観する (Das Ich schaut sich als empfindend an, dadurch, dass es producierend wird.)」(LZE, Sp. 653) との表現も見られる。

このように、シェリングは、自覚に関して自我が「自己」として客観になる」ということを、とりわけ Act (=Akt) という言葉を使いつつ説明しているが、カントの『遺稿』には、まさにこの Act という表現が散見され、これまで引用してきたシェリングの文言に触発されたかのような「自己定立」に関する叙述が見られる。

Act という点では、例えば、次のような記述がある。「意識の総合的な第一の活動〔作用〕(Der erste synthetische Act des Bewusstseyns)は、主観が自己自身を直観の対象にする活動であるが、同一性の規則に従った論理的(分析的)〔なもの〕ではなく、形而上学的(総合的)である」(XXII 85)。あるいは、Act を自己定立と関連させた叙述も見受けられる。「私自身の意識は、同一性の論理的活動、つまり、それによって自己自身を客体にする統覚的活動〔作用〕(der [Act] der Apperception durch den das Subject sich selbst zum Object macht)であり、単に何らかの対象に対応させつつ自己を定立する(setzen)概念である」(XXII 69)。「直観における空間と時間は、物ではなく、自己自身を定立する表象力の作用〔活動〕であって、この表象力の作用〔活動〕を通じて主体自身は自らを客体にする(Raum u. Zeit in der Anschauung sind nicht Dinge sondern actus der Vorstellungskraft sich selbst zu setzen, wodurch sich das Subject selbst zum Object macht.)」(XXII 88)。特に最後の引用にあるように、カントの「自己定立」は「空間と時間」に密接に関係し、しかも自己を「空間と時間」を通じて「感覚されうるもの」「感官と経験的直観の対象」と

して規定することを意味する(vgl. XXII 119)。こうしたことからカントがシェリングを読んでいたというトウシェリングの説は、一応信憑性の置けるものと考えられる。

しかし、だからと言って、トウシェリングのようにカントがシェリングを自らの後継者として認めたと考えてはならない。シェリングは、(フィヒテと同様²⁷⁾直観こそが哲学の基礎と考えるからである。最後にこの点を確認し本稿を閉じたい。

例えば、トウシェリングが最重要視する『概観』においてシェリングは、次のように述べている。「直観こそが人間精神における最高のもの、すなわち、それから爾余一切の我々の認識が初めてその価値と实在性を借りてくる(borgen)ものである」(HKA I/473)。あるいは、『体系』では先に引用した「自覚」に関する箇所において「自我の自己自身に関する知(Wissen)を通じて自我自身(客観)が初めて成立するがゆえに、そのような直観〔知的直観〕は自我である」(HKA I/9159)と述べたうえで、「知的直観こそあらゆる超越論的思惟のオルガノンである」(HKA I/9160)と言っている。また、先の自己客体化に関する叙述でも「自我とは自己自身にとって客体になる産出作用(Producieren)、すなわち知的直観作用に他ならぬ」(HKA I/9161)と自我の本質を知的直観のうちに看取している。

これに対して、カントは、『遺稿』においてシェリングを意識するかのようになにに記している。「超越論哲学は概念に基づきア・プリオリな総合的原則によって思惟する主

体を自己規定する純粋な観念論の体系であり、この概念を介して、自我は自己自身を客体に構成する (Transsc. Phil. ist das System des reinen Idealismus der Selbstbestimmung des denkenden Subjects durch synthetische Grundsätze a priori aus Begriffen vermittelt deren dieses sich selbst zu einem Object constituit) [強調引用者] (XXI 92)。直前で見たように、シェリングは「知的直観」こそ「思惟のオルガノン」とし、言わば、直観を思惟に先行させ超越論哲学の基礎と考えている。これに対してカントは自己客体化の思想を関連させながら「超越論的観念論の体系」が「超越論哲学」である限り「概念」に基づくことを強調するのである。

以上述べてきたように、現時点で論者は、『遺稿』の自己定立がシェリングの自覚概念に関連し、しかもカントが『体系』の書評とおそらくシェリングの若干の著作を読み、そうした自己客体化の思想を開陳していると考えている。ただし冒頭で見たように、『遺稿』のシェリングへの言及を巡っては様々な解釈がなされている。本稿ではそうした解釈の細部にまで立ち入ることができなかった。これについては稿を改めて論じることにした。

【注記】

カントの著作からの引用は、『アカデミー版カント全集 (Kants gesammelte Schriften)』の巻号をローマ数字で、頁をアラビア数字で記した。ただし『純粋理性批判』については、慣例に従い初版を A、第二版を B とした。

シェリングの著作については、いわゆる『歴史的批判版 (Historisch-Kritische Ausgabe im Auftrag der Schelling-Kommission der Bayerischen Akademie der Wissenschaften)』をテキストとして用い、略号 HKA の後に「慣例に従い系列」巻号、頁の順で引用箇所を示した。

【註】

- (1) 第一束ではのべ2箇所、第七束では5箇所でスベーンザンゲン文書がある (vgl. XXI 12, 13, 15, 17, 22, 34, 43, 48, 50, 51, 55, 64, 69, 70, 87, 89, 99, 101, XXII 54, 55, 56, 59, 19)。「スベーンザ主義」は、それぞれ一度の言及がある (vgl. XXI 98, XII 59)。
- (2) Vgl. B. Tuschling, Die Idee des transzendentalen Idealismus im späten Opus postumum. In: Übergang. Untersuchungen zum Spätwerk Immanuel Kants, hrsg. vom Forum für Philosophie Bad Homburg, Frankfurt a. M. 1991, S. 122ff.
- (3) Vgl. B. Tuschling, Transzendentaler Idealismus ist Spinozismus: Reflexionen von und über Kant und Spinoza. In: Spinoza im Deutschland des achtzehnten Jahrhunderts: zur Erinnerung an Hans-Christian Lucas, hrsg. von E. Schümann, N. Waszek und F. Weinreich, Stuttgart-Bad Cannstatt 2002, S. 144, auch vgl. insb. S. 157f.
- (4) Cf. P. Guyer, The Unity of Natur and Freedom: Kant's Concept of the System of Philosophy. In: The Reception of Kant's Critical Philosophy: Fichte, Schelling, and Hegel, ed. by S. Sedgwick, Cambridge 2000, p. 20, cf. pp. 44.
- (5) Vgl. E.-O. Onnasch, Kants Transzendentalphilosophie des

- Opus postumum* gegen den transzendentalen Idealismus Schellings und Spinozas. In: Immanuel Kants Philosophie der Natur, ihre Entwicklung im *Opus postumum* und spätere Wirkung, hrsg. von Ders. Berlin-New York 2009, S. 308.
- (9) Cf. F. Duque, *Islas en la laguna del sistema: La relación de Kant con Fichte y Schelling en el Opus postumum*. In: *Éndoxa: Series Filosóficas*, Nº 18, 2004, p. 201.
- (7) 拙論「超越論哲学の歴史的背景—カントとスピノザ主義」, 松本啓二郎・戸田剛文編著, 『哲学するのになぜ哲学史を学ぶのか』所収, 京都在学術出版会, 2012年, 260-275頁を特に参照。
- (8) ドイツのスピノザ受容という点では、次の(特に第1の)ものを参照。
- O. Rüdiger, *Studien zur Spinozarezeption in Deutschland im 18. Jahrhundert*, Frankfurt a. M. u.a. 1994.
- Hong H.-D., *Spinoza und die deutsche Philosophie: Eine Untersuchung zur metaphysischen Wirkungsgeschichte des Spinozismus in Deutschland*, Aalen 1989.
- D. Patzold, *Spinoza - Aufklärung - Idealismus: Die Substanz der Moderne* (zweite, erweiterte Aufl.), Assen 2002.
- (6) 正確な書名は『高名な現代哲学者クリスティアン・ヴォルフ氏によって論駁された、ベネディクトゥス・デ・スピノザの道徳論(＝倫理学)』(B. v. S. Sittenlehre widerlegt von dem berühmten Weltweisen unserer Zeit Herrn Christian Wolf)』と46頁。Vgl. M. Lauermann / M.-B. Schröder, *Textgrundlagen der deutschen Spinoza-Rezeption im 18. Jahrhundert*. In: *Spinoza im Deutschland des achtzehnten Jahrhunderts: zur Erinnerung an*
- Hans-Christian Lucas, hrsg. von E. Schümann, N. Waszek und F. Weinreich, Stuttgart-Bad Cannstatt 2002, S. 42f.
- ちなみに、当時「エチカ」所収のスピノザの『遺稿集』と「エチカ」のドイツ語訳の書誌情報は、エーヘルホルトの『自然神学』第四九節にも正確に記されており(vgl. XVIII 583)「カントがその存在を知らなうといふことは、考えられなう。
- (10) 「神の現存在の唯一可能な証明根拠」でカントはスピノザに言及している(vgl. II 74)。
- (11) F. H. Jacobi, *Über die Lehre des Spinoza in Briefen an den Herrn Moses Mendelssohn*. In: *Werke, Schriften zum Spinozastreit* Bd. I.1, hrsg. von K. Hammacher und I.-M. Piske, Hamburg 1998, S. 96 Anm.
- (12) Vgl. Baruch de Spinoza, *Tractatus de intellectus emendatione*. In: *Spinoza Opera II*, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, hrsg. von C. Gebhardt, Heidelberg 1972, S. 38f.
- (13) 福谷茂『カント哲学試論』, 知泉書館, 2009年, 219頁参照。
- (14) もっとも、周知の通り、スピノザと同様(あるいは、それ以上に)フィヒテやライプニッツからの影響も大きい。フィヒテから多大な影響を受けたことは、『哲学一般の形式的可能性』(1794)や『自我論』といったタイトルからも推察できるところであろう。ちなみに、本文で引用したヘーゲル宛書簡でも「スピノザにとっては世界(主観に対立している客観そのもの)が das Objekt schlechthin, im Gegensatz gegen das Subjekt)が一切でした。僕にとっては自我が一切です。[以下略]」(HKA III/1 22)と言われています。「自我が一切」とい

うことから少なくとも、この時期のシェリングのスピノザ主義とはスピノザの神をフィヒテの自我へと置き換えるものであることが分かるだろう。

スピノザへの批判も含め初期シェリングの知識学受容については次の研究書(の第四章)で詳しく論じられている。W. Jaeschke und A. Arndt, *Die klassische deutsche Philosophie nach Kant: Systeme der reinen Vernunft und ihre Kritik*, 1785-1845, München 2012, S. 76-95, またシェリングの『自我論』に定位しつつ知的直観という概念を中心にスピノザとの違いを強調し、さらにはフィヒテとの微妙な関心の違いも触れた研究としては直近では次のものも教示に富む。D. Nassar, *Spinoza in Schelling's Early Conception of Intellectual Intuition*, In: *Forthcoming in Spinoza and German Idealism*, ed. E. Förster and Y. Melamed, Cambridge 2012, p. 136-155.

一方、ライブニッツに関しては、例えば、『自然哲学に關する考案』では「精神と物質を全く一つのもの (Eines) と見なし、思考と延長を同一の原理の諸様態にすぎないと見なした第一人者はスピノザであった」と好評した後、「彼(＝ライブニッツ)の哲学を再興できるときがやって来た」(vgl. HKA I/5 76) とよく述べられている (vgl. auch HKA I/5 89ff.)。

(15) 例えば、N. K. スミスは一八〇二年から一八〇三年にかけて書かれたこの部分に関して、カントの精神衰弱の証拠であり、あまり重要ではないとし (Cf. N. K. Smith, *A Commentary to Kant's "Critique of Pure Reason"*, London 1923, p. 635) 「リビテンベルクの熱狂的なスピノザへの言及の影響のもとで、カントは「スピノザ、シェリング、リビテンベルクをカント自身の超越論哲学の展開における三つの段階

を典型化するもの」と考えたとしている (ibid.)。

(16) 近年、当時の文献が多く復刻されているが、管見では当該書評は紙媒体では復刻されていない。本稿では発刊当時までの形で見ることのできる Harald Fischer 社のマイクロフィッシュをテキストとして使用した。

(17) この書評に言及している先行研究は数多あるが、その内容を詳しく検討しているものは意外に少ない。トゥシェリングですら僅かに触れているだけである (vgl. Tuschling, 1991, S. 143)。管見の限り、オンナッシュが最も詳しく論じている (vgl. Onnassch, a. a. O., S. 323-327)。

(18) 評者はおそらくシェリングと何度も書簡を交わしているシュテフエンス (Henrik Steffens 1773-1845) と考えられている (vgl. HKA I/9.2 25)。

(19) 書評の原文は本文に示した通りであるが、評者が参照するよう指示している箇所は、「体系」第二章「超越論的観念論の一般的演繹」の冒頭から少し下った部分に相当する。実際にはシェリングは次のように述べているため、書評の表現は誤解を招きやすいかもしれない。「ここでは知識学が問題なのではなく、むしろ超越論的観念論の諸原則に従った知そのものの体系が問題であるがゆえに、我々はまた知識学によって規定された点に関して知の上述の体系の我々の演繹から出発しうるために、知識学に関しては一般的な成果だけを述べよう」(HKA I/9.1 68)。

(20) Cf. Immanuel Kant, *Opus postumum*, edited, with an introduction and notes, by E. Förster, translated by E. Förster and M. Rosen, Cambridge 1993, p. 286.

(21) Cf. E. Förster, Fichte, Beck and Schelling in Kant's Opus

postumum. In: Kant and his Influence, ed. by G. Mac. Ross and T. McWalter, Bristol 1990 (rpt. 2006), p. 168.

- (22) イエッシェ編集の『論理学』の「序文」に一箇所 (vgl. IX 7) リンク編集の『自然地理学』に二箇所 (vgl. IX 176 Anm., 251) 見られるだけである。このうち、『論理学』の「序文」はイエッシェの手によるものであるため、除外していただろう。また、『自然地理学』は、様々な面で問題が指摘され、特にその注はカントの手によるものかどうか信憑性が疑われている。この点については、岩波『カント全集16 自然地理学』の宮島光志による「解説」四八三頁を参照。

- (23) Vgl. A. Warda, Immanuel Kants Bücher, Berlin 1922, S. 54.

- (24) これは、もとも一七九七年から翌年にかけて、いわゆる『哲学雑誌』に掲載された一連の論文であり、それをシェリングが一八〇九年の著作集公刊の際、「知識学」云々というタイトル（と実際の執筆年）に改めたものである (vgl. HKA I/4 9ff., 56f.)。本稿で用いた HKA では『最近の哲学文献の概観』とされているため『概観』と略記する。

- (25) Vgl. Tuschling, 1991, S. 123.

- (26) アディッケスによれば、カントの *setzen* は *darstellen* や *aufsetzen* などと同義とされ、*machen* に関しては *anschaffen* や *schaffen* (*fingeren*) 等とも言え換えられるとされる。Vgl. E. Adickes, Kants Opus postumum: Kant Studien Ergänzungsheft Nr. 50, Berlin 1920, S. 657f.

- (27) フィヒテは『知識学への第二序論』でカントの知的直観が「存在に関係する」のに対して自分のそれは「行為に関係する」(vgl. GA. I/4, 225) とカントを批判し、「知識学」は「知的直観から、すなわち自我の絶対的活動性の直観か

ら出発する」(GA. I/4, 224) としている。もろには「この知的直観はすべての哲学にとって唯一の確固たる立脚点 (der einzige feste Standpunkt) である」(GA. I/4, 219) とも述べている。

付記 本稿は、科学研究費の助成（研究課題番号：23520043）の成果の一部である。